

# 夏目漱石『それから』で描かれた女性表象 — 三千代の「自我」—

片 山 礼 子

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 三千代の「自我」
- 3 菅沼の存在
- 4 百合—その象徴性
- 5 おわりに

### 1 はじめに

近年になり「自我」、この言葉が広く注目された。「近代的自我」について、文学の上でも多く議論された。明治期における一つの象徴としての自我意識について、文学作品に描かれた、ヒロイン達の表象としての「自我」が、どのように取り上げられてきたのだろうか。特に、本稿では、近代における「自我」について、夏目漱石、初期三部作『それから』を中心に考察をする。

『それから』は、明治四十二年六月から十月にかけて『朝日新聞』に掲載された連載小説である。漱石の『予告』によれば、「それから」はいろいろな意味においてそれからであるとしている。作品の主要登場人物として、長井代助をはじめ、平岡常次郎、その妻、三千代、代助の父・長井得、兄の誠吾、嫂・梅子、代助の甥・誠太郎、姪の縫、そして、三千代の兄・菅沼の存在である。

本論では、先に示した三千代の「自我」、菅沼の存在、百合—その象徴性を中心に考察をしたい。

さて、ここで、「近代」の起こり、このことは、いつの時代をさすのだろうか。明治元年、さまざまな分野における改革が驚くべき勢いでなされていたことは周知の通りである。もちろん、時代が大きく変わろうとする中で女性の生き方についても同様なことがいえるのではなかろうか。平塚雷鳥を中心とする「青鞥社」の結社も、そのことを如実に語っていると言えよう。新しい女性達の活動と共に、そのことは、当時の文学作品における女性の描かれ方にも少なからず影響をしているものと考えられる。そうした状況は、夏目漱石の初期作品における三部作、『三四郎』、『それから』、『門』に描かれた女性表象にもその影響の甚大さを語ることができよう。本論は、その試みと一つである。

## 2 三千代の「自我」

明治という時代に生きた女性達に内在する個性、自我が作品にどのように投影されているのだろうか。ヒロイン、三千代はどのように描写されているのか、そのあたりを中心に分析をする。

作品の中で三千代は、「色の白いわりに髪の高い、細面に眉毛のはっきり映る女である」あるいは、「三千代は美しい線をきれいに重ねたあざやかな二重瞼を持って目の恰好は細長い方であるが、瞳をすえてじっと物を見るときに、それがなにかの具合でたいへん大きく見える。代助はこれを黒目の働きと判断していた。三千代が細君にならない前、代助はよく、三千代のこういう目つきを見た。そうして今でもよく覚えている。三千代の顔を頭の中に浮かべようとすると、顔の輪郭が、まだでき上がらないうちに、この黒い、うるんだようにほかされた目が、ぽっと出てくる」と四章にある。

主人公三千代の容貌がクローズアップされる場面である。特に代助との関係が明瞭になる箇所でもある。

部屋のなかから顔を出した細君は代助を見て、蒼白い頬をぽっと赤くした。代助は何となく席につきにくくなった」、他にも「代助はこの細君を捕まえて、かつて奥さんと言ったことがない」など四章では代助と三千代との関係がより明瞭に描写されている。しかし、なぜか不自然さが代助と三千代の間に感じられる。それは次の描写からも言えるであろう。

廊下伝いに座敷へ案内された三千代は今代助の前に腰をかけた。そうしてきれいな手を膝の上にかさねた。下にした手にも指輪をはめている。上にした手にも指輪をはめている。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛った当世風のもので、三年前結婚のお祝いとして代助から贈られたものである。(中略)

代助は両手を頭の後ろへ持って行って、指と指を組み合わせさせて三千代を見た。三千代はこごんで帯の間から小さな時計を出した。代助が真珠の指輪をこの女に贈りものにする時、平岡はこの時計を妻に買ってやったのである。

このことについては、現代の結婚観と当時との違いはもちろんある。しかし、三千代をめぐって、『それから』の中で代助や平岡の人物像の他に、菅沼の存在を無視できないのである。菅沼の作品の中で存在そのものは多くは浮き出てはこない。しかし、親友であった代助との関係からして、なぜか不可解さが作品に内蔵しているように考えられる。菅沼に関連して、少しそんな場面を追ってみよう。

## 3 菅沼の存在

そのころ代助の学友に菅沼というのがあって、代助とも平岡とも、親しく付き合っていた。三千

代はその妹である。この菅沼は東京近県のもので、学生になった二年目の春、修業のためと号して、国から妹を連れて来ると同時に、今までの下宿を引き払って、二人して家を持った。その時妹は国の高等学校を卒業したばかりで、年はたしか十八とかいう話であったが、派手な半襟をかけて、肩上げをしていた。そうしてほどなくある女学校に通いはじめた。(中略)三千代が清水町にいたころ、代助と心安く口をきくようになってからのことだが、はじめて国から出て来た当時の髪のを代助からほめられたことがあった。その時三千代は笑っていたが、それを聞いたあとでも、けっして銀杏返しには結わなかった。二人は今もこのことをよく記憶していた。けれども双方とも口へ出しては何も語らなかった。

こうした描写からもなぜか、不可解さが浮上する。その一点目は菅沼と三千代との関係である。作品の中では兄妹の関係にある。しかし、この時点で三千代は国の高等学校を卒業し、女学校に通いはじめたころとある。年齢は十八と記されている。他にも、三千代の髪型が「銀杏返し」に結われていたと描写されている。この「銀杏返し」の髪型は、古く江戸時代にあつては十二、三歳から二十歳位までの髪型であった。しかし、明治期に入ると、「銀杏返し」は中年期の女性の髪型として一般化される。その後、三千代は一度もこの髪型を結わなかったこと、また、代助と三千代の間では「双方とも口へ出しては何も語らなかった」こととも関連してくる。

漱石の作品の中で、周知のように自分の意志をもった女性が多く登場する。それは、この時代の女性の描かれ方として当然のことかもしれない。武者小路実篤をはじめとして、有島武郎白樺派の作家たちが、漱石の作品を意識していたことは歪められない。

事実、実篤は『白樺の運動』の中で当時の文壇の様子を次のように記している。

当時の文壇のことは誰か他の人がかいてくれると思うが、自然派全盛であつて、田山花袋はしきりと平面描写を主張していた。藤村は破戒をかき、つづいて二、三のものをかき、夏目漱石は不意にあらわれて来て、僕達をおどろかし、独歩は人々から賞賛され出し、つづいて荷風があらわれ、白鳥や青果が頭をもたげて来、小山内も一部に認められ、白秋の詩はその特色のある調子で人を魅しかけて居た。つづいて潤一郎達の『新思潮』が出た。……(中略)……僕達の作品が当時の他の作品の内にまじってどんな印象を与えたか、それは他の人の方が知っているわけである。ただ自分達は、殊に自分は当時の自然主義には満足しなかった。花袋の主張する平面描写は、僕に出来ないことだけに、なお腹を立てた。(注1)

ここからも、いかに漱石の存在が大きかったかという点である。また、この当時の文壇の状況から、

「白樺」をはじめ、「スバル」、「新思潮」など多くの同人雑誌が誕生するのである。社会情勢を考えるならば、明治37年、日露戦争を契機とする日本資本主義体制、それにとまなう階級意識、階級分化にとまなう矛盾、社会意識へのめばえ、さらに、幸徳秋水らによる『平民新聞』の発行、言論の自由が唱えられた時期である。しかし、本来、人間解放、人間性の回復を願ったが、真の意味での理想へは、内面的な抵抗にとどまり、外面化するには、それ相当の時間が必要であったことも記さなければならない。つまり、こうした状況の中で、明治新政府が生まれ、旧来の因襲打破のきざしを見せながらも、本当の意味での自我の解放まで成長しきれなかったのではなかろうか。

文学の分野においても、そうした内面への憤りが大正文学を生み出す原動力あったという現実是否定できないだろう。

さらに、武者小路実篤は次のように述べている。

僕達は、特色を無理に出そうとは思わなかった。なんでもかくのではない。自分が情熱を感じてかけるものだけをかこうとした。その所が自然派の人とも違い、スバル派の人々とも違った。…(中略)…自分達は自然派にもあきたりないが、スバル派にもあきたりない。どっちにしても同じ程度に不満であるのだから、その仲間に入る気にはなれなかった。其処がいつのまにか自然派の特色になったのだと思う。我等は特色を無理に出そうとは思わなかった。彼らのものにあきたりないので、自分で自分の要求する文学を生み出そう。それが僕達の運動といえば運動であった。

#### 『白樺の運動』

武者小路実篤は、ここに初めて、個性、自我の尊厳を主張した。そして、彼らなりに新しい文学理論をうちたてたのであった。白樺派の同人達に共通していえる根本精神は、「自己を生かす」ことにあり、その主眼は個性の伸長にあった。当時の自然派主義文学者達は醜なる現実を描くことによって、自我を見出そうとしたのに対して、白樺派に属する同人達は、徹底した個人主義、エゴイストになりきることによって最高の価値を見出そうとしたのであった。従って、白樺の同人達はそれぞれの個性を、絶対的に愛好し、尊重し個々人が真剣に自己を見つめ、自己に忠実な生き方こそが、いわゆる求める個性伸長への道でもあり、彼らにとっては最も意義深いことであった。

さらに、武者小路実篤は、孔子の「小人は同じて和せず、君子は和して同ぜず」という言葉を引用して、

彼らは、君子かどうかは知らないが、お互いに尊敬し、仲良く仕事をしていたが、同一色になろうとは思わなかった。自己に不忠実な人は一人もいなかった。皆、自分の世界をもち、その世界に入りこんで仕事をした。だから、随分ちがう味の仕事をしている。しかし、共通点があるとすれば、

自己に忠実に自分が満足するまで、やまない力に支配されて仕事をした点である。(同上)

つまり、彼らにとって、自己表現のためには別に文学でなくても良かった。その表現は、小説でも戯曲でも、随筆でも、論文でも良かった。要するに、それぞれが十人十色の自分に適した方法で自己を確立し、自己を成長させていくところに意義があったのである。従って、園池公致のように病弱なため二、三の作品しか書くことができなくても園池自身が自己に忠実に生きたという事実、それが、終生、仲間との友情を失なわなかったということも、白樺派の特色を示しているといえよう。そして、彼らは、ここに「自」と「他」の区別し、提示することによって、これまでの個我意識をさらに発展させたといえよう。

しかし、それらは、まだ充分には社会の中で浸透していたとはいいがたい。実に現実認識を見据えた自己確立にまで発展させるまでには、ややしばらく時間がかかった。

さて、そうした状況の中で、自己の立場をどのように、規定づけ、徹底させていったのであろうか。

当時、社会一般の傾向としてトルストイに魅せられた若者が多かった。事実、武者小路実篤は、学習院高等科在籍中、トルストイに出会っている。トルストイの存在は、当時、白樺派作家達のみならず、青年達の間では欠くべからざる存在としてあげられる。

一九一〇年前後の激化する日本の状況の中で、武者小路実篤は「トルストイによって自分の生活を否定しだし」そして、「現在の社会組織はまちがっている」と彼の著作『或る男』の中で述べた。

また、『それから』における三千代の「自我」、そのことは漱石の作品の中で、『三四郎』の美禰子にも通ずるのだが、一見、従順そうに描かれている女性であったにしても、内面はいかにも芯が強く、強烈な個性と自我意識を持ち合わせた女性を登場させている。その当時の女性表象として、有島武郎の代表作『或る女』の中で描かれるヒロイン・葉子の自我にも相通じるものがある。また、その他に、『それから』の中で無視できないのは、百合の花である。

「百合」の象徴性、「自我」との関係である。「百合」はどのような植物なのだろうか。そして、花の「香り」の関わりである。『それから』の描写の中で、「百合」の花とのかかわり、それは、それまでの三千代とは様相を異にして、せきを切ったように、彼女は代助を訪ねる場面がある。この描写での三千代の描写は、決して同一人物とは思われないほどの三千代の描かれかたである。

他にも、十章で、代助が三千代、菅沼の目前で百合の花を生ける印象的な場面がある。つまり、百合の花、そのものについてである。一本は菅沼、二本目は代助、そして、三本目は三千代を象徴しているのだろうか。

次に示す描写もそうした場面である。

兄は趣味に関する妹の教育を、すべて代助に委任したごとくにみえた。代助を待って啓発されるべき妹の頭脳に、接触の機会をできるだけ与えるようにつとめた。代助も辞退はしなかった。あとから顧みると、みずから進んでその任にあたったと思われる痕跡もあった。三千代はもとより喜んで彼の指導を受けた。三人はかくして、巴のごとくに回転しつつ月から月へと進んでいった。有意義か無意識か、巴の輪はめぐるにしたがってしだいにせばまってきた。ついに三巴がいっしょに寄って、丸い円になろうとする少し前のところで、忽然その一つが欠けたため、残る二つは平衡を失った。

こうした場面からも考えられよう。

漱石の作品には「白百合」が描かれていることも注目をしてよいだろう。「百合」には強烈な香りがある。「百合」が描かれるのは『それから』以外にも『夢十夜』の一話でも取り上げられ、漱石文学における作品の中で取り上げられる「自我」との関わりにおいて無視できないのである。これまでも「百合」の存在が作品に拘わる存在の大きさに対しての先行文献をあげることもできる。

そうした中で、こうした場面に出会うにつれて、「百合」と「自我」から、次に示す短歌を想記させる。それは「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(注2)

この短歌は、花橘のかおりから、かつてのなつかしさが想起されるというのが本来的な意味だが、『それから』の本文中で、三千代が代助のもとを訪ねることとも関わってこよう。

また、『それから』の人間関係と『門』の人物関係に類似性が考えられる。『門』で描かれる「宗助」と「御米」の関係を取り上げてみると、それは、まるで『それから』の延長線であるかのように読めるのである。

それは、完全に世間と遮断した形での「宗助」と「御米」の姿である。

つまり、代助と三千代は、『門』での宗助と御米との関係についての考察も必要となろう。周知のように、これまでもそうした関連性については取り上げられてきた。ここでは、社会の中での「宗助」と「御米」というよりも、『門』では二人だけの世界が展開される。

宗助と御米の一生を暗く彩った関係は、二人の影を薄くして、幽霊の様な思を何所かに抱かしめた。彼等は自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合って年を過ごした。

当初彼等の頭脳に痛く応えたのは、彼等の過が安井の前途に及ぼした影響であった。二人の頭の

中で沸き返った凄い泡の様なものが漸く静まった時、二人は安井もまた途中で学校を退いたという消息を耳にした。彼等は固より安井の前途を傷つけた原因をなしたに違なかった。次に安井が郷里に帰ったという噂を聞いた。次に、病気を羅って家に寝ているという報知を得た。二人はそれを聞くたびに重い胸を痛めた。

この部分の描写からも「宗助」と「御米」は、生きていく中で暗い負い目を背負っていかなければならなくなる暗示が作品に表出されている。

「自我」に関しては、この当時、発表された作品からも窺われるのである。

しかし、漱石ほど、こうしたテーマで作品が創られていることも珍しくはない。

作品には、共通の関連性も見出せる。

ここで、漱石はなぜ、こうした作品を描いたのかという点である。もちろん、『それから』では、当時の文明批評家としての冷徹な視点で漱石自身が語っている点も事実であろう。この事に関しては、先にも触れたが、武者小路実篤の『白樺の運動』でも明らかである。他に、是非ふれておかなければならない事実として有島武郎の日記には漱石の作品についてふれている箇所がある。

同時代作家としての関連性、そして作品からの意外な接点が見出される。

先に、有島武郎が漱石を意識していたことをふれた。『それから』の主要登場人物、代助の生き方そのものが、当時の白樺派作家達をモデルにしたのではないかという見方も可能である。(注3)

#### 4 「百合」— その象徴性

百合の花について、文学作品では多く取り上げられてきた。元々「百合」には西洋的な要素がある。また、「香」についてである。もちろん、漱石の作品では、東洋的な要素、西洋的な要素は否定できない。しかし、いずれにしても、植物との関係、ここではスズランや白百合との関わりを切り離すことはできない。前章でもふれたが、本文中、十章で代助が三千代、菅沼の目前で「百合」の花を生ける場面を三千代が想起する描写がある。一本は菅沼、二本目は代助、そして、三本目は三千代を象徴していると読み解くことも、決して不自然ではないのである。

他にも、菅沼と代助、そして三千代との関係において、見落としてならない描写や場面がある。このことは、前章で取り上げたこととも関連してくる。

三千代の兄というのはむしろ豁達な気性で、かけへだてのないつきあいぶりから、友だちにはひと

く愛されていた。ことに代助はその親友であった。この兄は自分が豁達であるだけに、妹のおとなしいのをかわいがっていた。国から連れて来て、いっしょに家を持ったのも、妹を教育しなければならないという義務の念からではなくて、まったく妹の未来に対する情合いと、現在自分のそばに引きつけておきたい欲望とからであった。彼は三千代を呼ぶ前、すでに代助に向かってその旨を打ち明けたことがあった。その時代助は普通の青年のように、多大の好奇心をもってこの計画を迎えた。

三千代が来てから後、兄と代助とはますます親しくなった。どっちが友情の歩を進めたかは、代助自身にもわからなかった。兄が死んだあとで、当時を振り返ってみるごとに、代助はこの親密のうちに一種の意味を認めないわけにゆかなかった。

兄は死ぬ時までそれを明言しなかった。代助もあえて何事をも語らなかった。かくして、相互の思わくは、相互の間の秘密として葬られてしまった。兄は在生中にこの意味をひそかに三千代にもらしたことがあるかどうか、そこは代助も知らなかった。代助はただ三千代の挙止動作と言語談話からある特別な感じを得ただけであった。

この場面も作中での代助、菅沼、三千代の人物関係を考える時に重要な箇所となろう。作品として存在価値が問われるならば、その背景にある小道具としての「百合」その主張性にも無関心ではられない。

このことは、与謝野晶子の『みだれ髪』でも同様に、百合をキーワードとした情熱的な短歌の数々、おのずと恋愛を髣髴とさせる。つまり、漱石の生きた、時代そのものにもスポットがあたっただろう。そのことは、『それから』以外にも漱石の作品の中で、『草枕』の那美、『虞美人草』の藤尾をはじめとして、『三四郎』の美禰子、そして三千代と漱石が作中で描こうとした女性達の共通項を見出すことができる。

こうしたことは、『それから』を通じて「自我」— 女性表象 — は十分に、現代にも通ずる今日性が内蔵していると考えられる。

## 5 おわりに

1910年代の新しい時代の幕明け、文学における女性表象、特に、ここでは漱石の『それから』の三千代の「自我」を中心に考察を重ねてきた。内外的にも激動期を迎えたそうした時期に女性達は、どのように描かれ、生き抜いてきたのだろうか。そうした女性達の生き方から学ぶことが多分にある。例をあげるならば、江種満子氏の『わたしの身体、わたしの言葉』の中で、漱石に関連して、『虞美人草』の藤尾を取り上げている。ここでは、「我」に注目し、女性表象として「藤尾」にスポットが



あてられている。また、ここで、見落としてならない事柄として1970年の「記号論」の関心の高まり、そして文学作品における新しい女性達の登場と共にその背景、状況が実証的に述べられている。こうした先駆的な研究から、学ぶことの重大さ改めて気づかされる。同時に、またこれまでとは違った視点から作品に向き合わなければならないだろう。今後は、『それから』のみならず、漱石の初期三部作『三四郎』で描かれたヒロイン・美禰子の存在も大きく関わってこよう。また、同時期に発表されたヒロイン達の「自我」、文学作品に描かれた女性表象の検討をさらに深めていきたい。

(注)

注1 『白樺』の運動 武者小路実篤全集（新潮社版）に所収

ここでは、武者小路実篤が、当時の文壇の状況について、きめ細かに述べている。

「自」と「他」との区別、白樺派作家、武者小路実篤と有島武郎の現実認識の捉え方の違いについても知ることができる。

注2 『古今集』所収 — 読み人しらず —

この歌の本意から、「百合」に込められたその象徴性を探りたい。他にも塚谷祐一『それから』の白くない白百合（文藝春秋）から、文学作品に描かれた「百合」の存在をさまざまな角度から知ることができる。

注3 西垣勤『有島武郎論』有精堂選書

この中では、白樺派の作家達と代助についての関連性など、「漱石と白樺派」と題して興味深い内容で論が進められている。

## Self of woman representation-Michiyo whom it was from Soseki Natsume "Sorekara",and was drawn

Reiko Katayama

It was late yeays,and "self",these words attracted attention widely.

How will "self"as representation of heroines drawn on a literary work

about self-consciousness as one symbol in the Meiji period have been taken up?

I have eyes and do in particular a note of consideration in "from Soseki Natsume,ineitial trilogy  
it"about" self"in modern times by this report.

"Sorekara"it is a serial story in a newspaper published serially from June,1909 to October.

"Sorekara"then,according to "the notice"of Soseki,I do it in various meanings.

By the main subject,existence of Suganuma,lily-consider the symbolism-led

by "self"of Michiyo's that they showed eaylier.